

下北沢再開発

世田谷区長「秋から議論」

小田急線跡地 利用素案見直し契機に

賛成、反対派が対立する下北沢(世田谷区)の再開発に関するシンポジウムが二十八日に開かれ、四月に就任した保坂展人区長が初めて出席した。区長は「違

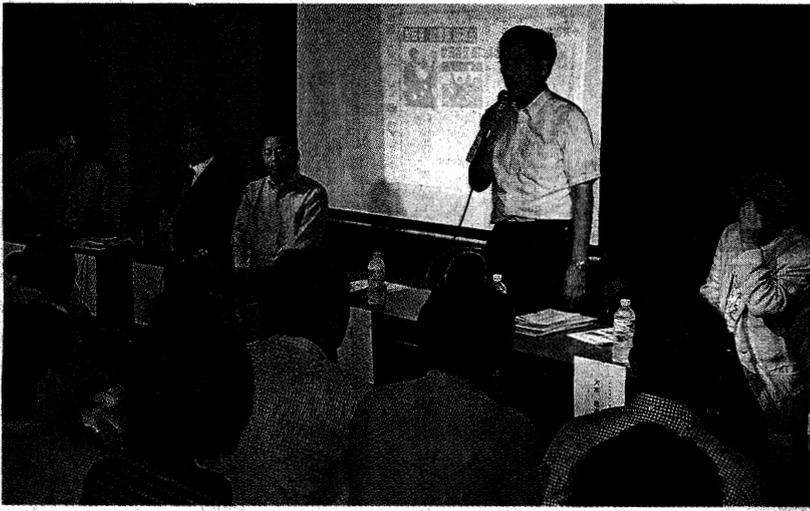
う立場の人が一緒に話せる枠組みをつくりたい。秋以降加速して道筋をつけたい」と述べ、地下化工事中の小田急線の跡地利用素案の見直しをきっかけに、再開発計画では、小田急線の地下化に伴い、バスが乗り入れられる駅前広場や最大幅二十六メートルの道路を造る。入り組んだ路地に個性的な店が並び、下北沢らしさがなくなると反対派による訴訟も起きた。

保坂区長は「人優先、まちの発展、防災対策が三原則。現状の計画が果たしているのか。東日本大震災を踏まえもう一度まちづくりを考えたい」と語った。具体的には、区で作った小田急線の跡地利用素案について「統一感に欠け、防災面で問題がある」と指摘し、九月に説明会を開いたうえで、地元の商店主ら

含めて区民の意見を広く聴く場を設けて見直す。並行して「シモキタ」ブランドや防災対策を区民が話し合う場

もつくり、再開発計画の再考へつなげる方針だ。シンポは、反対派によるイベント・シモキタボイスの一環で、下北沢アレイホールに約百五十人が集まった。大木雄高・実行委員長は「開かれた議論の場をつくってほしい」と話した。

反対派とは立場を異にする、しもきた商店街振興組合の柏雅康理事長も初めて出席し、「結論の先送りはいでほしい」と要望した。(松村裕子)



初めて保坂展人区長(立っている人)も出席したシモキタボイス＝世田谷区で